

れきし 散歩

冬のくらし ～冬に活躍した昔のもの～

はじめに

3学期になると、市内の小学3年生が、昔の暮らしについて学ぶ授業で、歴史博物館へ勉強をしに来てくれます。これに合わせ、この時期、歴史博物館では、常設展示室の一部で昔の道具を紹介しています。今年、主に暖をとる道具を中心に展示していますので、今回は、その展示品の一部をご紹介します。

炬燵と行火

炬燵とは、もともとは床に設けた炉に檜を置き、炬燵蒲団をかけて、数人で使っていました。これを掘炬燵と言います。このように基本的には複数の人で使うものを炬燵と言います。その後、明治時代になると、火入れと呼ばれる瓦焼きの入れ物に炭火を入れて、炬燵蒲団をかけただけの簡易な炬燵が普及しました。これを置炬燵と言います。置炬燵は、掘炬燵とちがって、自由に移動させることができます。置炬燵は、寝る時にも蒲団の足もとに入れて使われましたので、朝起きたら、蒲団が焦っていたということもあったようです。



【置炬燵】



【豆炭行火】

また、行火とは、持ち運び可能な手足を温める暖房器具のことです。特に、夜、蒲団に入れて使う1人用のものを指すことが多いようです。炬燵と呼ぶか行火と呼ぶかは、市内でも地域や時代によってもちがうようですが、炬燵としても行火としても使ったものは、両方の名前と呼ばれています。

さて、展示しているものの中で、安全炬燵と呼ばれるとても珍しいものがあります。炬燵と呼ばれていますが、寝具の中に入れて使うもので、その役割から行火の一種と言えます。六角柱の檜の中の中央に、瓦製ではなく、



【安全炬燵】

金属製の火入れが付けてあります。この火入れは、自在に回転し、常に上を向くようにできているので、寝ている時にうっかり足で蹴飛ばしても、中の灰や炭火が蒲団にこぼれることがない優れたものです。

懐炉(カイロ)

カイロと言えば、現在では使い捨てのものを想像するでしょう。では、昔のカイロはどのようなものだったのでしょうか。昭和53(1978)年に使い捨てカイロが発売されるまでは、ケースの中に懐炉灰と呼ばれる燃料を入れて火をつけて、くり返し使うカイロが主流でした。



【懐炉】

懐炉灰の原料は、ヨモギ・ゴマ・麻殻・わらなどを焼いて紙に詰めたものです。

また、大正12(1923)年には、専用のベンジンを燃料にした懐炉も発明され、「ハクキンカイロ」という製品名で販売されました。これは、火口と呼ばれる部分がガラス繊維と白金(プラチナ)できている、気化したベンジンが触媒作用で64℃～65℃の熱を出す仕組みです。ベンジンを1回満タンに入れると、約



【ハクキンカイロ】

24時間同じ温度が保たれます。懐炉灰を用いた懐炉の燃焼時間は8時間程度ですので、それに比べると3倍の燃焼時間があります。ちなみに、このハクキンカイロは現在も販売されているロングセラー商品でもあります。

さいごに

これらの道具には、熱源が火から電気へ変わっていくなかで、昔の人のさまざまな知恵や工夫が感じられます。常設展示室では、今回ご紹介したものの以外にも、さまざまな暖かいモノを展示していますので、市内で実際に使われていた道具から、ぜひ昔の人の知恵や工夫を見つけてみてください。